

# 認知言語学的アプローチによるスペイン語語彙学習・指導に関する新提案（その3）

——「メトニミー」の導入——

福森雅史

## Resumen

Este tratado es la tercera parte de la manera para enseñar las palabras españolas desde el punto de vista de la categorización conceptual. Los ejemplos concretos tratados aquí son “Juan dio una *vuelta* por Hokkaido.”, “Da *vuelta* a la izquierda.”, “La Luna *gira* alrededor de la Tierra.”, “El camino *gira* a la derecha.” y tal y cual. Estos ejemplos se pueden observar del punto conceptual de “metonimia” y “perfil”. Esto muestra nuestra cognición por lo que lingüísticamente organizamos nuestro mundo externo a través del término “parte y todo”, que se denominó la expresión idiosincrática metonímica por George Lakoff y Mark Johnson (cf. Lakoff and Johnson (1988, 1999)).

**Palabras claves :** メトニミー (metonimia), 認知言語学 (lingüística cognitiva), 近接性 (proximidad), 部分と全体 (parte y todo), 焦点化 (perfil)

## 1. はじめに

前稿「認知言語学的アプローチによるスペイン語語彙学習・指導に関する新提案（その2）—「メタファー」の導入—」では、認知活動の一つである「メタファー (metáfora)」に光を当てた。従来、「メタファー」とは、伝統的哲学及び文学における詩的空想力が生み出す修辭的な文飾の技巧として見なされてきた (Cf. Lakoff and Johnson (1980: 3-6), (1999: 3-8))。しかしながら、ここで言う「メタファー」とはそのような言葉の綾を指すものではなく、自身にとって最も身近な存在である「肉体的なもの」や「より明確な輪郭を持つもの」を基盤にして、「非肉体的なもの」や「不明確な輪郭を持つもの」を認識することで、我々の概念体系の大部分を形成するという、日常生活のあらゆる営みの根本を成すものであることを確認した。また、「時は金なり (EL TIEMPO ES DINERO)」という概念メタファーを活用した語彙学習・指導法の一つを提示することで、これまで機械的な丸暗記に依存するしか術 (すべ) がなかった語彙指導に楔 (くさび) を打つだけでなく、論理的な枠組みで正しい語用を想定することが可能となり、ひいては学習者の主体的な思考を促すことも期待できることを主張した。この「メタファー」と同様に、我々が外界世界を認識し、様々な概念を体系化する上で重要な認知活動の一つが「メトニミー (metonimia)」である。

そこで、以下では、まず「メトニミー」とは何なのか、我々にとってどのように重要なのかを説明し、ひいては第二言語の具体的な学習指導に反映させ得る手段の一つとして、どのように「メトニミー」を導入すればよいのか、その学習指導内容の一端を提示する。

## 2. 「メトニミー (metonimia)」の構造

### 2. 1. 「近接性 (proximidad)」の関係におけるメトニミー表現

人間は或る対象物に名前をつけるために、それと近い関係にある別の対象物を利用する知的活動を行っている。このような指示関係は「近接性 (proximidad)」と呼ばれる。以下 (1) がその実例である。

- (1) *Mónica apreció un Dalí ayer.*  
(昨日、モニカはダリを観賞した)

上記 (1) の文は、下記 (2) と等価的であることから明らかなように、

- (2) *Mónica apreció un cuadro pintado por Dalí ayer.*  
(昨日、モニカはダリによって描かれた絵画を観賞した)

Dalí という語の本来の指示物である「人物」そのものを見るのではなく、その人物と近接関係にある「ダリの作品 (= 絵画)」を指示している。つまり、「製造者で製品を表す (EL PRODUCTOR POR EL PRODUCTO)」というメトニミー (metonimia) 表現であると言える。しかしながら、「メタファー」がそうであった (cf. 福森 (2011b)) のと同様に、ここで言うメトニミーとは、古代ギリシア時代から定義されている文学上の単なる伝統的修辭技法ではない。つまり、我々の思考、態度及び行動にまでも構造を与えると同時に、その基盤が我々の日常経験に根づいているような、もっと大きな枠組みで捉えられる認知活動を指す。

このような「近接性」は、下図 (3) に示されるような単一の概念領域内における「写像 (proyección)」関係<sup>1)</sup>として表すことができる (Cf. Lakoff and Turner (1989: 103), Cuenca y Hilferty (1999: 111))<sup>2)</sup> :



この「製造者で製品を表す」というメトニミーには、上記（1）の他にも下記（4a-d）のような例が見られる。

- (4) a. *María compró un Cervantes ayer.*  
(昨日、彼女マリアはセルバンテスを買った)
- b. *Choqué contra un Mercedes ayer.*  
(昨日、私はメルセデスと衝突した)
- c. *Quiero cambiar IBM por Sony.*  
(私は IBM を Sony に変えたい。)
- d. *Voy a tomar un Pepsi.*<sup>3)</sup>  
(ペプシを飲もう)

なお、上記（4a-d）のメトニミー表現は、各々次の（5a-d）として捉えられる。

- (5) a. Cervantes の指示物でもって、それと近接関係にある「Cervantes の本」を表示。  
b. Mercedes の指示物でもって、それと近接関係にある「Mercedes 社製の車」を表示。  
c. IBM の指示物および Sony の指示物でもって、それと近接関係にある「IBM 社製のコンピュータ」および「Sony 社製のコンピュータ」を表示。  
d. Pepsi の指示物でもって、それと近接関係にある「Pepsi 社製のコーラ」を表示。

この「製造者で製品を表す」というメトニミー表現は、下記（6a-d）の英語表現や（7a-d）の日本語表現に示されるように、異言語間に渡って共通して観察されるものである。

(6) [英 語]

- a. *Mary played the Chopin on the piano in the concert last year.*  
(昨年そのコンサートでメアリーはピアノでショパンを弾いた)
- b. *Sidney Sheldon is on the top shelf.*  
(シドニー・シェルダンは本棚の上段にある)
- c. *I'd like to buy a Ford.*  
(私はフォードを買いたい)
- d. *I bought a new pair of Nikes on the web yesterday.*  
(昨日、私はウェブで新しいナイキ1足を購入した)

(7) [日本語]

- a. 先日、彼は北斎を購入した。  
b. 私は早く漱石の続きが読みたい。  
c. 彼女はルイ・ヴィトンの新作を持って街に出かけた。  
d. 先月、彼はホンダだけでなくカワサキも購入した。

さらに、神経生理学の観点から記された次の(8)に支持されるように、

- (8) コリンズとロフトス (Collins, A. M. & Loftus, E. F., 1975) は、… 意味的距離の概念を付加した新たなネットワークモデルを提案した (図4-29)。このモデルでは、概念間の意味関係の強さがリンク間の距離として示されている。「カナリア」と「黄色」との距離は、「カナリア」と「ペット」より短い。また、「鳥」とその典型的下位カテゴリーである「カナリア」との距離は「鳥」とその非典型的下位カテゴリーである「ダチョウ」より短い。このモデルによって、文検証課題 [=たとえば被験者に「カナリアは黄色いですか」、「カナリアは飛びますか」、「カナリアには皮膚がありますか」といった文を提示し Yes か No かをできるだけ早くかつ正確に判断させる課題] における典型性効果なども説明できるようになった。また、コリンズらは、このモデルに基づく「活性化拡散理論」を提起した。この理論によれば、ある概念(鳥)が刺激されると活性化がネットワークのリンクにそって拡散する。すなわち、そのノード [node: つながりの意] にリンクした他のノードや属性も活性化される。また、その概念に意味的に近い概念(カナリア)の活性化のほうが遠い概念(ダチョウ)の活性化より高い。文検証課題における反応時間は、この活性化レベルを反映するものと考えることができる。

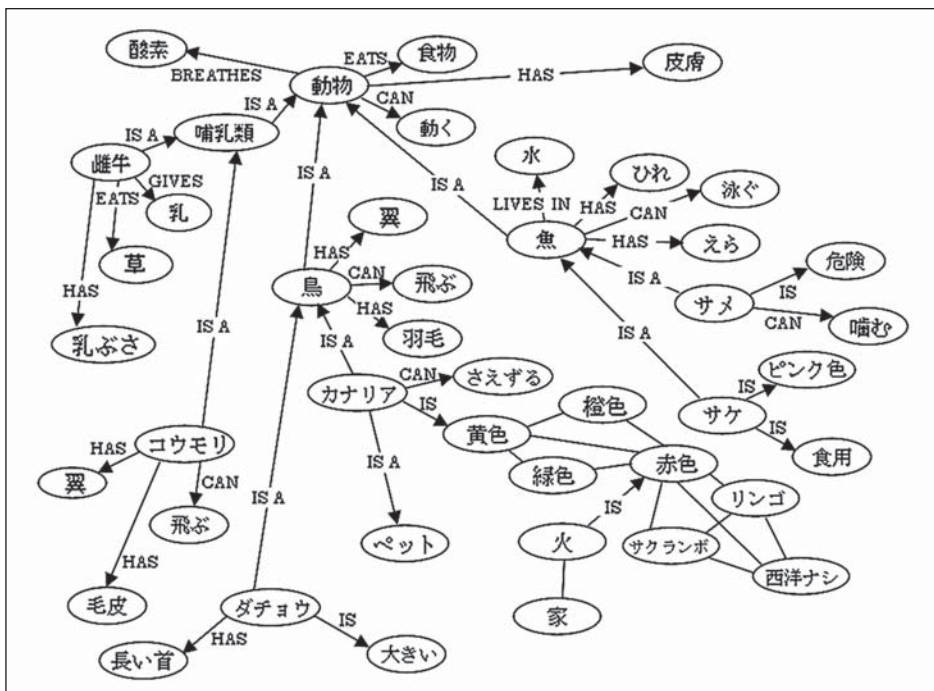


図4-29 コリンズとロフトスの活性化拡散モデルにもとづく概念的ネットワークモデル (Collins & Loftus, 1975)

— 鈴木 (編) (1997: 51-52) (一部省略・下線・[ ] 内表記筆者)

我々の大脳の中には「近接性」に基づいた概念的ネットワークが張り巡らされていることから、各々の結びつきを明らかにしてスペイン語語彙教育に活用することは、スペイン語母語話者が各表現を身につけるような、言語習得期の自然な流れに沿った学習・指導を実践することに直結する。事実、大脳活動の結果事象として現れる言語表現からは「製造者で製品を表す」メトニミー表現のみならず、当然のことながら、そこには「近接関係」における様々な様相が観察される<sup>4)</sup>。その実例の一端を以下（9a-f）に示す（cf. Lakoff and Johnson (1988: 35-40), Ungerer, Fricrich and Hans-Jörg Schmid (1996: 116)）。

- (9) a. 「容器で内容物を表す（EL RECIPIENTE POR EL CONTENIDO）」  
＜グラス → グラスの中身＞  
¡Vamos a tomar unas *cañas*!  
（一杯飲みに行こう！）
- b. 「材料で製品を表す（EL MATERIAL POR EL PRODUCTO）」  
＜銀 → 銀貨＞  
El hombre pagó en *plata*.  
（その男は銀貨で支払った）
- c. 「場所で機関を表す（EL LUGAR POR LA INSTITUCIÓN）」  
＜ウォール街 → 米国金融業界＞  
*Wall Street* está aterrada.  
（ウォール街は恐慌状態にある。）
- d. 「場所で出来事を表す（EL LUGAR POR EL ACONTECIMIENTO）」  
＜広島 → 広島で起きた核兵器による惨事＞  
¡Nunca más *Hiroshima*!  
（ノー・モア・ヒロシマ！）
- e. 「生産地で製品を表す（LA REGIÓN PRODUCTORA POR PRODUCTO）」  
＜ボルドー → ボルドー産のワイン＞  
Vamos a beber un *Bordeaux*.  
（ボルドーを私と一緒に飲もう）
- f. 「使われている物で使用者を表す（EL OBJETO USADO POR EL USUARIO）」  
＜ギター → ギターの演奏者＞  
La *guitarra* tiene la gripe hoy.  
（今日、ギターはインフルエンザにかかっている）
- g. 「管理者で被管理者を表す（EL CONTROLADOR POR LO CONTROLADO）」  
＜ナポレオン → ナポレオンの率いる軍＞  
*Napoleón* perdió en Waterloo.  
（ナポレオンはワートルローで敗れた）
- h. 「被管理者で管理者を表す（LO CONTROLADO POR EL CONTROLADOR）」  
＜バス → バス会社＞

El *autobús* está en huelga.

(バスはストライキ中である)

i. 「原因 (となるもの) で結果を表す (LA CAUSA POR EL EFECTO)」

<舌 → 言語>

Su *lengua* materna es el catalán.

(彼の母語はカタルーニャ語である)

いずれの場合であっても、これまで述べてきた「近接関係」の観点から解釈され得るが、その指示関係を活用すると、たとえば、以下 (10a-c) のような語における各々の多義のつながりを説明することも可能となる。



2. 2. 「部分と全体 (parte y todo)」の関係におけるメトニミー表現

2. 1. で見た「近接性」という捉え方に加え、人間は或る対象物に名前をつける時、特に注意を引く「部分 (parte)」だけを採り上げてその対象物「全体 (todo)」を表そうとする言語活動も行なっている (Cf. Lakoff and Johnson (1980: 35-40), 上野・森山・福森・李 (2006: 112 - 127), 森山・福森・北野 (2007: 172-173), 福森 (2007: 74-77))。例えば、次の (1a-c) の文では、

(1) a. Muchas *buenas cabezas* trabajan en el instituto.

(研究所では多くの有能な頭が働いている → 研究所では多くの有能な頭脳の持ち主が働いている)

b. Pagamos diez euros  $\left\{ \begin{array}{l} \text{por cabeza} \\ \text{per cápita} \end{array} \right\}$ .

(頭一つにつき 10 ユーロを支払います → 一人当たり 10 ユーロを支払います)

c. Faltan *manos*.

≡ Hay escasez de *manos*.

(手が足りない)

*cabeza* / *cápita* や *manos* が各々文字通り「身体部位そのもの」を指示しているわけではない。つまり、*cabeza* / *cápita* や *manos* という身体の一部に焦点を当てることによって、それぞれ「*cabeza* / *cápita* の指示物である部分を含めた身体全体」や「*manos* の指示物という部分を含めた身体全体」を表そうとする発話者の意識が働いているのである。このように、「或るもの全体の一部分に焦点を当てること」を「焦点化 (perfil)」と言う<sup>5)</sup>。このような焦点化を通して「部分と全体 (parte y todo)」の関係を用いた言語表現は決して稀有なものではなく、日常生活においてごく普通に見られるものである。「部分と全体」の関係を用いたさらなる事例を以下 (2a-d)

に挙げる。

- (2) a. Necesitamos *caras nuevas* para la compañía.  
(会社には新顔が必要だ)
- b. En el festival de cine había muchas *caras famosas*.  
(その映画祭には多くの名だたる顔ぶれが参加していた)
- c. Aquí hacen falta *brazos*.  
(ここでは腕が足りない → ここでは (人) 手が足りない)
- d. Tiene ocho *bocas* en su casa.  
(彼は家に8つの口を持っている → 彼には8人の扶養家族がいる)

また、この「部分と全体」の関係を用いた表現はスペイン語にのみ存在するものではなく、当然のことながら、他の言語にも一般的に見られるものである。英語および日本語におけるその実例を、それぞれ以下 (3) - (4) に挙げる。

(3) [英 語]

- a. There are a lot of good *heads* in this institute.  
(この研究所には有能な頭が大勢いる → 有能な頭脳の持ち主が大勢いる)  
— 上野・森山・福森・李 (2006: 112)
- b. This work needs more *hands*.  
(この仕事にはもっと (人) 手が要る)
- c. There are a few *new faces* in our section this year.  
(今年は我々の部署に数人の新人がいる)

(4) [日本語]

- a. 明日までに頭数 (あたまかず)<sup>6)</sup> を揃えなくてはならない。
- b. この辺りに立ち寄ることがあったら、また顔を出してよ。
- c. 忙しいなら手を貸そうか？
- d. 茶髪や長髪は雇わない。

当然のことながら、このような「部分と全体」の関係は「身体部位と人全体」だけに限られたものではない。事実、下例 (5a-b) では、

- (5) a. Viví bajo el mismo *techo* con María tres años.  
(私は3年間マリアと同じ屋根の下 (= 家) で暮らした)
- b. No me dieron ni *techo* ni ración.  
(私は雨風を凌ぐ屋根 (= 泊まる場所/家) も食べ物ももらえなかった)

建物の一部である *techo* (屋根) の指示物でもって、その全体物である「建物 (= 家)」がイメー

ジされる。また、次の (6a-b) に見られる *puerta* (ドア, 戸) という語も、

- (6) a. *Mi abuela vive en la puerta de enfrente.*  
(私の祖母は向かいのドア (=家) に住んでいる)
- b. *Jose anduvo vendiendo verduras de puerta  $\left\{ \begin{array}{c} a \\ en \end{array} \right\}$  puerta.*  
(ホセはドアからドアへ (=家から家へ) 野菜を売り歩いた)

その指示物でもって、その全体物である「建物 (=家)」全体を表している。更に、下記 (7) の文では、

- (7) *Finalmente, adelanté el turbo diesel.*  
(遂に、私はそのディーゼル・ターボ (付エンジン) を追いついた)

車の一部である *turbo diesel* (ディーゼル・ターボ (付エンジン)) の指示物でもって、その全体物である「車」をイメージさせる。さらに、英語と日本語における実例をそれぞれ以下 (8) - (9) に挙げる。

(8) [英 語]

- a. *I live under the same roof as her.*  
(私は彼女と同じ屋根の下 (=家) に住んでいる)
- b. *My parents live next door to me.*  
(両親は私の隣のドア (=家) に住んでいる)
- c. *John sells cosmetics (from) door to door.*  
(ジョンはドアからドアへ (=家から家へ) 化粧品を売り歩いている)
- d. *John have got a new set of wheels.*  
(ジョンは新しい車輪一式 (=自動車, バイクなど) を手に入れた)

(9) [日本語]

- a. 10 数軒 (けん) の店が立ち並ぶ。
- b. 笑う門 (かど) には福来たる。
- c. マンションではなく一戸 (こ) 建てに住みたい。
- d. 私は両親と一つ屋根の下で暮らしている。

これまで見てきた「部分と全体」の関係を用いた表現は、いずれも「部分で全体を表す (LA PARTE POR EL TODO)」ものであったが、その逆、すなわち「全体で部分を表す (LA TODO POR EL PARTE)」表現も存在する。例えば、下記 (10a-b) の文は、

- (10) a. *De repente, sonó el teléfono.*



（突然、電話が鳴った）

b. José { *cogió*  
*colgó* } el teléfono.

（ホセは電話を { 取った }  
{ 切った }）

それぞれ文字通り、「電話機全体が鳴った」、「電話機全体をつかんだ→取った／吊るした→切った」<sup>7)</sup> という事象を表しているわけではない。正確には、全体である *teléfono*（電話）の指示物を表す語でもって、各々その一部である「電話のベル」、「電話の受話器」を表している。この「全体で部分を表す」表現もまた、次の (11) の英語表現や (12) の日本語表現のように、異言語間に渡って共通して観察されるものである。

(11) [英 語]

We have to fill up the *car*.

（我々は車を満タンにしなければならない）

→ [文字通りの意味]：車全体が（ガソリンで）満たされる。

→ [捉え方]：全体である *car*（車）の指示物でもって、その一部である「車の燃料タンク」を表している。

(12) [日本語]

清美は毎晩、寝室に鍵をかけて寝ている。

→ [文字通りの意味]：寝室全体に鍵をかける。

→ [捉え方]：全体である「寝室」の指示物でもって、その一部である「寝室のドア」を表している。

実は、以下 (13) に示されるように、これまで見てきた「部分と全体」の認識図式は 2. 1. で既に見た「近接関係」と同様に「メトニミー」という考え方に収束することになる。

(13) Metonymy

Instead, we are using one entity to refer to another that is related to it. This is a case of what we will call *metonymy*. ... We are including as a special case of *metonymy* what traditional rhetoricians have called *synecdoche*, where the part stands for the whole, as in the following.

（そうではなくて、我々は或る存在物を用いて、それと関係づけられる別の存在物に言及しようとしているのである。これがいわゆる「喚喩（メトニミー：metonymy）」である。…我々は喚喩の特別なケースとして、伝統的修辭学者たちが「提喩（シネクドキー：synecdoche）」と呼んでいるものも含めている。提喩というものは、次に示されるように、部分が全体を代表するものをいう。）

THE PART FOR THE WHOLE

(「部分が全体を代表する」)

The *automobile* is clogging our highways. (= the collection of automobiles)

(「車」 (=多くの車) でハイウェイの交通が麻痺している)

We need a couple of *strong bodies* for our team. (= strong people)

(我々は自身のチームのために二, 三の「強い体」 (=強い体の持ち主) を必要としている)

There are a lot of *good heads* in the university. (= intelligent people)

(その大学には多くの有能な「頭」 (=知能の高い人) が存在している)

I've got a new *set of wheels*. (= car, motorcycle, etc.)

(私は新しい「車」 (=自動車, バイクなど) を手に入れた)

We need some *new blood* in the organization. (= new people)

(我々は組織に「新しい血」 (=新しい加入者) を必要としている)

In these cases, as in the other cases of metonymy, one entity is being used to refer to another. ... Metonymy, on the other hand, has primarily a referential function, that is, it allows us to use one entity to *stand for* another.

(これらの例においては, 喚喩の例がそうであるように, 或る存在物が別の存在物に言及されるのに用いられている。…他方, 喚喩は主として, 指示機能, すなわち我々に或る存在物を用いさせて他の存在物を代表させる機能を持っているのである。)

— Lakoff and Johnson (1980: 35-36) (一部省略・下線・日本語訳筆者)

伝統的な文学の修辞法では, 厳密には「近接関係」の指示関係のみが「換喩: メトニミー (metonimia)」として扱われ, 「部分と全体」の指示関係は「提喩: シネクドキー (sinécdoque)」という別のものとして扱われてきた。しかしながら, 次の (14) にまとめられるように, 本論では認知言語学の枠組みに基づき, 両者をまとめて「メトニミー」として捉えている (Cf. Ungerer, Fricrich and Hans-Jörg Schmid (1996: 116))<sup>8)</sup>。

- (14) メトニミー — 「近接 (proximidad) 関係」の指示関係  
 (metonimia) — (=文学上の「換喩: メトニミー (metonimia)」; 別名「トポニミー (toponimia)」)  
 — 「部分と全体 (parte y todo)」の指示関係  
 (=文学上の「提喩: シネクドキー (sinécdoque)」; 別名「パートニミー (partnimia)」)

非常に重要な点なので再度述べておくが, ここで言うメトニミーとは, 古代ギリシア時代から定義されている文学上の単なる伝統的修辞技法などではない。我々の思考, 態度及び行動にまでも構造を与えると同時に, その基盤が我々の日常経験に根づいているような, もっと大きな枠組みで捉えられる認知活動を指すのである。このような観点から, スペイン語の初修課程で学習が要求されると考えられる語の一つである *cuerpo* という単語に目を向けることにする。

下例 (15) - (16) に見られるように,

- (15) [(体的一部分である) 胴体を指示する場合]
- a. Juan es largo de *cuervo*.  
(フアンは胴が長い)
  - b. Manuel tiene el *cuervo* grueso.  
(マヌエルは胴が太い)
  - c. María es una bella muchacha de *cuervo* estilizado.  
(マリアは引き締まった胴 (=ウエスト) の美少女だ)
- (16) [体全体を指示する場合]
- a. Me duele todo el *cuervo*.  
(私は体中が痛い)
  - b. Alma sana en *cuervo* sano.  
(健全な精神は健全な肉体に宿る)
  - c. Ana tiene un *cuervo* muy bien proporcionado.  
(アナはとても均整のとれた体をしている)
  - d. José yacía su *cuervo* inerte.  
(ホセは生気のない体を横たえていた)
  - e. El *cuervo* ya lleva veinticuatro horas muerto.  
(死体はすでに 24 時間経っている)

スペイン語 *cuervo* は「(体的一部分である) 胴体」と「体全体」という2つの意味を持つ。こうした意味の違いは、「部分」と「全体」のどちらに焦点が当たっているか、すなわち「部分の焦点化」か「全体の焦点化」かの違いによって生じている。以下 (17a-b) としてその違いを図示する。

- (17) a. 胴体 (= 部分) を焦点化  
(頭/腕/脚は焦点外)



- b. 体全体を焦点化



このように、頭や腕、脚が焦点外となるのは、あくまで身体を中心は胴体の部分であり、頭や腕、脚などの部分は付属的なものだと考えられているからである。そのため、下記 (18) に見られるように、

- (18) 1 身体, 肉体; 体つき.  
2 物体, 個体, 物質.  
3 (人間・動物の) 遺体.

- 4 胴体；(衣服などの) 見ごろ.
- 5 (ものの) 主要部, 本体；(書物・論文の) 本文, 本体部.
- 6 (職業などの) 団体, 集団.

—『小学館 西和中辞典』(s.v. *cuervo, sm*) (下線筆者)

「胴」を意味する *cuervo* には「主要部, 本体」および「団体, 集団」の意が存在するのに対し、「体の一部 (= 肢, 手足)」が語源である *miembro*<sup>9)</sup> には、次の (19) に示されるように、

- (19) 1 《de... …の》一員, 構成員, メンバー.
- 2 肢, 手足.
- 3 《婉曲》陰莖, ペニス (= ~ *viril*).
- 4 (組織・機械・建造物の) 各構成要素, 一部；部位, パーツ, 部材.

—『小学館 西和中辞典』(s.v. *miembro, sm.*) (下線筆者)

「一員, 構成員, メンバー」や「各構成要素, 一部；部位, パーツ, 部材」といった意が見られるのである。さらには、「体の一部」である「肢, 手足」を表す *miembro* に「分離」の意を表す接頭辞 *dis-* (s.v. *dis-*<sup>1</sup>, 『小学館 西和中辞典』) と動詞化接尾辞 *-ar* (s.v. *-ar*, 『小学館 西和中辞典』) とを付けた *dismembrar* は「人間／動物から手足を切り離す」という意味になるのである。以下 (20) に

- (20) 1 解体する, 分裂させる.
- 2 手足を切断する [もぎ取る].

—『小学館 西和中辞典』(s.v. *dismembrar, vt.*) (下線筆者)

このような理由から、次の (21) - (23) に見られるように、

- (21) *La compañía formó cuerpo con la mayor empresa.*<sup>10)</sup>  
(その会社はより大きな企業と合併した)
- (22) *They acted in a body.*
- (23) 彼らは一体となって活動した。

背景化していた肢部 (= 身体の一部：頭, 腕, 脚) が前景化して胴体と結合する概念が生まれる時、つまり、(17a) 図の捉え方が (17b) 図のそれに移行する時、スペイン語、英語、日本語といういずれの言語においても、焦点外にあった肢部が同伴物となって焦点内に浮かび上がる「一体」概念として言語化されるのである。

詰まるところ、次の (24) に示されるように、

- (24) 感覚器官は, それぞれ光線や音波など, この世界の中のある種のエネルギー (刺激)

に応答し、そのエネルギーを感覚情報として神経系のエネルギーに変換するインターフェイスの機能をもつ。知覚過程は、これら感覚情報をそのほかの情報とともに用いて、外界で何が生じているのかを推定する。…ある感覚器官は、ある特定の刺激に対してだけ応答するようにできている。眼に対する光線、耳に対する音波がそれであり、このような刺激は適当刺激といわれている。…人間は視覚動物であるといわれるように、人間にとってもっとも主要な感覚は視覚である。

— 鈴木（編）（1997: 20-21）（下線筆者）

「焦点化」による認識が言語に反映されるメカニズムは偏に、我々の知覚神経器官を通じた経験によっており、外界からのエネルギーを取り込んで神経系のエネルギーに変換する装置としての機能を果たす最も重要な器官が「視覚」であると言える。

このような「視覚経験→大脳内に入力された情報の思考→言語出力」の認知メカニズムを活用すれば、日本語訳の機械的な丸暗記を偏重してきた伝統的な語彙学習指導では説明されなかった正しい語の運用能力を育むことが可能となる。そこで、次セクションでは、*vuelta* や *girar* といった語を採り上げ、特に「部分と全体」の捉え方を利用することで、第二言語の具体的な学習指導に反映させ得る手段の一つとして、どのように「メトニミー」を導入すればよいのか、その学習指導内容の一端を提示する。

### 3. 「部分と全体」の関係を用いた語彙学習・指導法の一例

人間は既知のイメージを用いて他の物事を効率よく表現しようとするが、「円」に関するイメージもその認知活動の現れの一つである。そこで、ここでは「全体と部分」および「焦点化」という人間の認識を利用した単語の捉え方を観察する。まず、*vuelta* という語を用いた (1) の文に目を向ける。

- (1) *Ese camino da la vuelta al lago.*  
(その道は湖の回りを一周している)

上例 (1) に見られるように、*vuelta* の中心的イメージは「回転」、特に「一回転」である。以下 (2) にこれをまとめる。

- (2) *vuelta* の中心的イメージ：一回転

したがって、以下 (3) - (4) に見られる *vuelta* にも、

- (3) *Di una vuelta en coche por Andalucía el mes pasado.*  
(先月、私はアンダルシアを車で一回りした)
- (4) *Quiero dar la vuelta al mundo algún día.*

(いつか世界一周したい)

それぞれ次の (3') - (4') の図で描かれるような「一回転」のイメージが存在する。

(3')



(4')



しかしながら、次の (5) - (6) に目を転じると、

(5) Di la *vuelta* a la página.

(私はページをめくった)

(6) Da *vuelta* a la derecha.

(右に曲がりなさい)

各々「完全な一回転」の移動の軌跡が描かれなくても関わらず、なぜ *vuelta* が用いられるのか、という疑問が生じる。この疑問を解決する鍵となるのが「部分と全体」の認識である。そこで、まず下図 (7a-b) に目を向ける。

(7) a.



<斜辺>

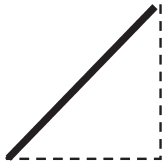
b.



<弧>

上図 (7a-b) はそれぞれ「斜辺」と「弧」を表しているが、人間の知覚認識上、いずれもそれら単独では認識されていない、と言われている。つまり、以下 (7'a-b) に描かれるように、「斜辺」と「弧」はそれぞれ「直角三角形」と「円」という全体を背景とする「一部分」として捉えられているのである (cf. Langacker (1987: 184), (1988: 59))。

(7) a.



<全体：直角三角形 — 部分：斜辺>

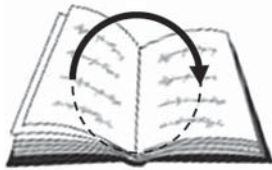
b.



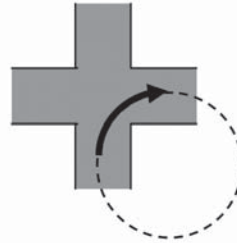
<全体：円 — 部分：弧>

実は、このような知覚認識が *vuelta* の多義性にも当てはまり、それぞれ下図 (5') - (6') に示されるように、

(5')



(6')



点線で描かれた「円」という「全体」が背景となって、それぞれ実線で示された「半円」および「1/4の円」という「弧 (=部分)」の軌跡が「焦点化」されているのである。これを以下 (8) にまとめる。

(8) *vuelta* の中心的イメージ：

一回転 — [一回転によって示される「円」全体の一部分が焦点化] → 弧

だからこそ、次の (9) - (10) においても、

(9) El coche dio la *vuelta*.

(車はUターンした)

(10) Me encontré por casualidad con un amigo en el camino de *vuelta* de la universidad.

(私は大学からの帰り道に友人と偶然出会った)

それぞれ以下 (9') - (10') の図に示されるように、

(9')



(10')



いずれも「弧」の概念で捉えられることから、それぞれ「Uターン」、「帰り道」という日本語

訳が当てはまるのである。

さらに、季節の移り変わりは、次図(11)に見られるように、「円循環」として捉えられることから、

(11)



次の(12a)は下図(12b)に示されるように、上図(11)の円周軌道の一部を焦点化した概念の現れと考えられる。

(12) a. Ya estamos a la *vuelta* del verano.

(夏もうすぐそこだ)

b.



このような「円 (=背景となる全体) — 弧 (=焦点化された一部分)」の認識は何も *vuelta* のみに限らない。例えば、動詞 *girar* にも同様の認識が反映されている。動詞 *girar* は、下記(13)に示されるように、

(13) *girar*. [← [ラ] *gyrum* (*gyrus* の対格)「回転; 輪」← [ギ] *gýros*「輪, 円」; 関連 *girar*, *girasol*. [英] *autogiro*, *gyration*「回転」, *gyroscope*「ジャイロスコープ」]

—『小学館 西和中辞典』(s.v. *girar*) (下線筆者)

その語源は「輪, 円」を意味するギリシア語 *gýros* に遡ることからも明らかなように、本来は、「(円を描くような)回転」を表す語である。以下(14)にその実例を示す。

(14) La Tierra *gira* alrededor del Sol.

(地球は太陽の周りを回っている)

そして、「円」全体の一部分である「弧」に焦点を当てることで得られた拡張概念の一例が次の(15)である。



(15) El coche *giró* a la izquierda.

（その車は左に曲がった）

#### 4. まとめ

本稿では、「メトニミー」概念に注目することで、我々人間が如何にして外界世界を認識し、様々な概念を体系化しているのかを観察した。「メトニミー」には「近接性」の関係によるものと「部分と全体」の関係によるものとの2種類が存在するが、本稿では、特に後者に焦点を絞り、「部分と全体」の認識で捉えられる各種表現を観察した。現在の語彙学習・指導においては、日本語訳を偏重する機械的な丸暗記に依存する現状は今も昔も変わらない。このような状況を打破し、効果的な語彙学習・指導を行う上で最も注目すべきことの一つは言葉に刻まれた人間の認識であり、母語話者の大脳内に潜むメトニミー・焦点化といった認知メカニズムを明らかにし活用することが肝要であると言える。最後に、メトニミー表現に重点を置いた経験主義の立場に立脚してこれまで詳述してきたことを明示した一例を稿末で提示することにより、和訳偏重主義の改革を願って本稿を結ぶことにする。

#### 注

1) (→ p. 114)

Lakoff and Turner (1989: 34) では、「写像 (proyección)」は次の [1] のように定義されている：

[1] This reading comes from our implicit knowledge of the structure of the LIFE IS A JOURNEY metaphor. Knowing the structure of this metaphor means knowing a number of correspondences between the two conceptual domains of life and journeys, such as these:

- The person leading a life is a traveler.
- His purposes are destinations.
- The means for achieving purposes are routes.

∴

We will speak of such a set of correspondences as a “mapping” between two conceptual domains. Thus we will speak, for example, of destinations being mapped onto purposes.

（このような読み方は、「人生は旅である」メタファーの構造について我々が持っている暗黙の知識から生じるものである。このメタファーの構造を知っているということは、以下に見られるような、人生と旅という2つの概念領域の間に成り立つ多くの対応関係があることを知っているということを意味する：

- 人生を送る者は旅人である。
- 目的は旅の到達点である。
- 目的を果たすための手段は経路である。

∴

このような対応関係について、2つの概念領域間の「写像」と言うことにする。例えば、目的へと写像されている到達点と言うことにする。）

— Lakoff and Turner (1999: 3-4) (一部省略・日本語訳筆者)  
つまり、「写像」とは「或る概念領域 (= 目標領域) を別の概念領域 (= 根源領域) で理解する時、その2つの概念領域間に成り立つ対応関係」とまとめられる。

2) (→ p. 114)

メタファーを通じた写像関係とメトニミーを通じたそれとの違いは、下記 [1] に記されているように、

[1] Metonymy and metaphor are sometimes confused because each is a connection between two things. But the connections are very different:

- In metaphor, there are two conceptual domains, and one is understood in terms of the other.
- In metaphor, a whole schematic structure (with two or more entities) is mapped onto another whole schematic structure.
- In metaphor, the logic of the source – domain structure is mapped onto the logic of the target – domain structure.

None of this is true in metonymy.

- Metonymy involves only one conceptual domain. A metonymic mapping occurs within a single domain, not across domains.
- Metonymy is used primarily for reference: via metonymy, one can refer to one entity in a schema by referring to another entity in the same schema.
- Metonymy, one entity in a schema is taken as standing for one other entity in the same schema, or for the schema as a whole.

Metaphor and metonymy do have some things in common.

- Both are conceptual in nature.
- Both are mappings.

(メトニミーとメタファーは、いずれも2つの物事を結びつけていることから、よく混同される。しかしながら、その結びつき方は大変異なったものである：

- メタファーでは、2つの概念領域が在り、一方は他方に置き換えて理解される。
- メタファーでは、(2つ及びそれ以上の存在物を含む) 一方のスキーマ構造が丸ごと他方に写像される。

— メタファーでは、根源領域の構造内の論理は、目標領域の構造内の論理に写像される。

これらの特徴はメトニミーには見られない。

- メトニミーはただ一つ概念領域を必要とする。メトニミー的写像は単一の領域内で起こるのであって、複数の領域間で起こるのではない。
- メトニミーは主として指示のために用いられる。メトニミーを通して、或るスキーマ内に在る存在物を指示することによって、同一スキーマ内に在る別の存在物を指示することができる。
- メトニミーでは、或るスキーマ内の存在物は、同一スキーマ内に在る別の存在物、またはスキーマ全体を表すことによって捉えられる。

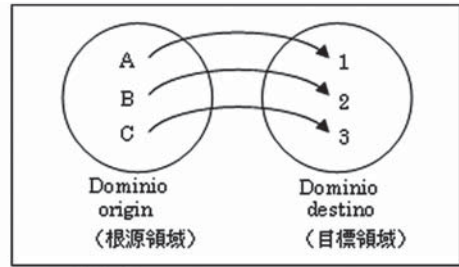
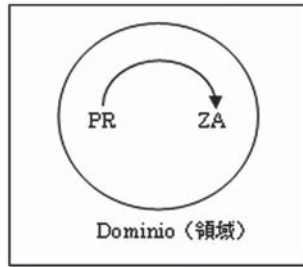
メタファーとメトニミーには、以下のような共通点が存在する。

- 両者は概念上の操作である。
- 両者は写像関係である。

— Lakoff and Turner (1989: 103) (日本語訳・下線筆者)

メタファーが「或る概念領域 (= 根源領域) から他の概念領域 (= 目標領域) への写像関係」として捉えられるのに対し、メトニミーは「単一の概念領域内における写像関係」として捉えられることにある。Cuenca y Hilferty (1999: 111) では、この写像関係の違いが次図 [2] のように示されており、その違いを視覚的に捉えることができる：

- [2] (a) Metonimia (メトニミー) (b) Metáfora (メタファー)



PR = punto de referencia (参照点)  
 ZA = zona activa (活性領域)  
 A, B, C = atributos del dominio origen (根源領域の特性)  
 1, 2, 3 = atributos del dominio destino (目標領域の特性)

— Cuenca y Hilferty (1999: 111) (日本語訳筆者)

また, Taylor (1989: 123-124, 133) においても同様の考えが示されている。

- 3) (→ p. 115)

同じ飲料であっても, 下記 [1] の Bordeaux の指示物は,

- [1] Vamos a beber un *Bordeaux*.  
 (ボルドーを私と一緒に飲もう)

次記 [2] と意味的に等価であることから明らかなように,

- [2] Vamos a beber un *vaso de vino producido en Bordeaux*.  
 (ボルドーで生産されたグラス一杯のワインを私と一緒に飲もう)

「製造者」ではなく「生産地」を表している。つまり, Bordeaux という生産地で「ボルドー産のワイン」という製品を表している「生産地で製品を表す (LA REGIÓN PRODUCTORA POR PRODUCTO)」というメトニミーである。

- 4) (→ p. 117)

このような「近接関係」をフィルターとした指示関係は日常表現に満ち溢れている。たとえば「顔を剃る」, 「頭を刈る」といった表現を, 文字通りそのままの意で解釈すると非常に奇異な事象となってしまう。これらも各々, 「顔面 (の皮膚) と近接関係にあるひげ」, 「頭 (皮) と近接関係にある毛髪」というように「近接関係」で捉えればよい。

- 5) (→ p. 118)

「全体」を表すために焦点化される「部分」は, その一部であればどんな部分でもよいというわけではない。そこには, 焦点化される部分を選ばれるだけの理由があると考えられる。本論 2. 2. (1a-b) で「有能な頭脳の持ち主である人」を表すために cabeza / cápita (頭) が焦点化されているのは, 「知能を司る身体部位である頭」に焦点を当てる必要があるからであり, 他方, 本論 2. 2. (1c) で「仕事 (例えば, 労働作業) をする人」を表すために manos (手) が焦点化されているのは, 「その労働作業をする役割を持つ手」に焦点を当てる必要があるためである。

- 6) (→ p. 119)

「頭」という語で「頭という一部を含めた人全体」が表されていることが明らかになれば, 次の [1] - [2] に見られる日本語の「首を切る」や「首にする」という表現において,

- [1] 200 人の従業員の首を切った。  
 [2] 200 人の従業員を首にした。

何故「首を切る」／「首にする」ことが「解雇」の意を表すに至るかという意味変化のプロセスについても説明され得る。この表現は, 「首を切る→命／存在を絶つ」ことで, その会社の構成員としての「命／存在を絶つ」ことを表していることは勿論のこと, 「頭という一部」でそれを含めた「人全体」が表

されることから、「(従業員) 首を切ることでその頭数を減らす」ということが「従業員を解雇する」ことを意味するようになるからである。なお、「解雇表現」の概念的捉え方の詳しい説明と、その実際の語彙学習に応用する有用性について詳しくは、上野・森山・福森・李(2006: 365-383)、福森(2008)参照。

## 7) (→ p. 121)

「《de… / en… …に》吊るす、掛ける」(cf.『小学館 西和辞典』(s.v. colgar, *vt.*, 1))を意味する動詞 colgar を用いて「電話を切る、通話を切る」事象を表現するのは、下図 [1] に示されるように、昔の電話機が上方に設置されていたことに由来する。

[1]



つまり、上図 [1] に見られるように、昔の電話機は「受話器をフックに吊るす／引っ掛けることで通話を切る」構造になっていたことに由来する。なお、英語で「電話を切る」ことを hang up, 「電話を切らないで待つ」ことを hold on, 「電話をして、その電話に相手が出る」ことを call up と言うのも同じ理由である。

## 8) (→ p. 122)

たとえば、下記 [1] において、

[1] メガネが走って来た。

「メガネ」は付属物であるため、「それをかけている人」と近い位置にある、すなわち「近接関係」として捉えることができる。また同時に、それをかけている人の「一部分」とみなすことができることから「部分と全体」の関係としても捉えることが可能である。このように、現実の言語表現においては、「近接関係」とも「部分と全体」の関係とも捉え得るものが多く存在し、両者の境界は曖昧だと考えられることから、本稿では、両者をまとめて「メトニミー」として捉える立場を採る。

## 9) (→ p. 124)

スペイン語 miembro は下記 [1] に示されるように、

[1] MIEMBRO, del lat. MĒMBRUM

(MIEMBRO, ラテン語 MĒMBRUM から)

— *Corominas* (下線・日本語訳筆者)

ラテン語 mĕmbrum に由来するが、これは、以下 [2] に示されるように、

[2] 1 《?1280》性器、陰莖；(人・動物の) 身体の一部、手、足。

2 《a1338》組織体的一部分、構成要素；(宮廷の) 成員、議員。

◆ ME *membre* □ (O) F < L *mēmbrium* limb, member, part ~ IE \**mĕmsro-* ~ *mĕms-* flesh, meat (Gk *mērōs* thigh / Oslav. *mĕso* flesh / Skt *māmsá-*: cf. Goth. *Mimz*) .

— 『英語語源辞典』(s.v. member, *n.*) (下線筆者)

「肢：手足 (limb)、一員 (member)、部分 (part)」の意を表す。

## 10) (→ p. 124)

「合体させる」を意味する動詞 incorporar にも「一体化」の概念化が存在する。というのも、動詞 incorporar の語根 corpo- は「体、胴体」を意味する cuerpo と語源を同じくするからである。

## 参考文献

- Collins, Allan. M., & Loftus, Elizabeth. F. (1975) A Spreading-Activation Theory of Semantic Memory. *Psychological Review*, 82, pp. 407-428, New York: Macmillan.
- Cuenca, Maria Josep & Joseph Hilferty (1999) *Introducción a la Lingüística Cognitiva*. Madrid: Ariel Lingüística.
- Lakoff, George & Mark Johnson (1980) *Metaphor We Live By*. Chicago : University of Chicago Press. (渡辺昇一 (訳) (1986) 『レトリックと人生』大修館書店.) (Marín, Carmen González (trad.) (1986) *Metáforas de la Vida Cotidiana*. Madrid : Catedra.)
- Lakoff, George & Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh : The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought*. New York : Basic Books.
- Lakoff, George & Mark Turner (1989) *More than Cool Reason : A Field Guide to Poetic Metaphor*, Chicago : University of Chicago Press. (大堀俊夫 (訳) (1994) 『詩と認知』紀伊国屋書店.)
- Langacker, Ronald. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar (Vol. 1.) Theoretical Prerequisites*. Stanford; Calif: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. W. (1988) "A View of Linguistic Semantics" in Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*. pp. 49-90, Amsterdam: John Benjamins.
- Real Academia Española (=RAE) (1999) *Gramática Descriptiva de La Lengua Española*, Tomo. 1-3, Madrid : Editorial Espasa Calpe.
- Taylor, John. R. (1989) *Linguistic Categorization*. Oxford: Clarendon Press. (辻幸夫 (訳) (1996) 『認知言語学のための14章』紀伊国屋書店.)
- Ungerer, Friedrich & Hans-Jörg Schmid (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London: Longman. (池上嘉彦 他 (訳) (1998) 『認知言語学入門』大修館書店.)
- 上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉 (2006) 『英語教師のための効果的語彙指導法 — 認知言語学的アプローチ —』英宝社.
- 河上誓作 (編) (1996) 『認知言語学の基礎 — An Introduction to Cognitive Linguistic』研究社.
- 鈴木清 (編) (1997) 『人間理解の科学 — 心理学への招待 —』ナカニシヤ出版.
- 福森雅史 (2007) 『異言語間における動作主導前置詞の概念研究 — スペイン語・ポルトガル語・英語を通して —』(大阪大学言語社会学会博士論文シリーズ Vol. 42) 大阪大学言語社会学会.
- 福森雅史 (2008) 「異言語研究と実践語彙教育: 「容器メタファー」に見る認知言語学導入の研究意義 — スペイン語・英語・韓国語・日本語を通して —」『語学教育部ジャーナル』第4号, pp. 105-120, 近畿大学語学教育部.
- 福森雅史 (2011a) 「認知言語学的アプローチによるスペイン語語彙学習・指導に関する新提案（その1） — 「投影」の導入 —」『立命館大学言語文化研究』第22巻, 第4号, pp. 197-215, 立命館大学国際言語文化研究所.
- 福森雅史 (2011b) 「認知言語学的アプローチによるスペイン語語彙学習・指導に関する新提案（その2） — 「メタファー」の導入 —」『立命館大学言語文化研究』第23巻, 第1号, pp. 195-217, 立命館大学国際言語文化研究所.
- 森山智浩・高橋紀穂・福森雅史 他 (2010) 『英語前置詞の概念 — 認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から —』(FD 語学教育改革シリーズ1) プイツーソリューション.
- 森山智浩・福森雅史・北野英敏 (2007) 「異言語間における前置詞の意味変化と概念的メカニズムの認知言語学的研究 — 「近接」 / 「交換」概念のインターフェイスと言語教育 —」『太成学院大学紀要』第9巻 (通号 26号), pp. 169-197, 太成学院大学.

【辞書・辞典】

[*Corominas*] : Corominas, Joan & José A. Pascual (1980) *Diccionario Crítico Etimológico Castellano e Hispánico*. Madrid : Editorial Gredos.

[*DLE*] : Real Academia Española (2001) *Diccionario de La Lengua Española*, (Vigésima segunda edición) Madrid : Editorial Espasa Calpe.

北原保雄 (編) (2003-2004) 『明鏡国語辞典』大修館書店.

小西友七・南出康生 (編) (2002) 『ジーニアス英和大辞典』大修館書店.

高垣敏博 他 (編) 『小学館 西和中辞典』(第2版) 小学館.

寺澤芳雄 (編) (1999) 『英語語源辞典』研究社.

新村出 (編) (1998) 『広辞苑』岩波書店.

山田善郎 他 (編) (2004) 『現代スペイン語辞典』(改訂版) 白水社.

山田善郎 他 (編) (2004) 『和西辞典』(改訂版) 白水社.

「近接性(proximidad)」の関係で捉えられる表現

☑ plato

☑ plata

☑ tapa

☑ 男 ① 皿, 平皿 ② (皿に盛った)料理

cf. plano 形 ①平らな ②平面上の ☑ 男 ①平面, 面 ②地図

cf. fuente 女 ①大皿, 深皿, ②(大皿に盛られている)料理

platillo ☑ 男 ①小皿, (カップの)受け皿 ▶ -illo 縮小辞

◎ plato と同源で、「平たいもの」のイメージで捉えればよい。

◎ 原義は「金貨／銀貨」。意味変化は以下のとおり。

(金貨・銀貨)→(板金)→(金属食器)→平皿

└─[容器と内容物との近接関係]→(皿に盛った)料理

◎ plato は fuente から取り分ける1人用の皿。fuente は取り分け用の大皿, platillo は plato より小さい皿を指す。

☑ 女 ① 銀 ② 銀製品・銀細工 ③ 銀食器 ④ 銀貨 ▶ -a 名尾

◎ 意味変化は以下のとおり。

(銀皿・銀板)─[材料と製品との近接関係]→ 銀

☑ 女 ① (箱・瓶・鍋などの)蓋(ふた) ② 表紙

③ (酒の)肴, おつまみ, タパ(ス)

cf. plato ☑ 男 (皿に盛った)料理 ración ☑ 女 中皿の1皿 ▶ -ón 増大辞

◎ 意味変化は以下のとおり。

(箱・瓶・鍋などの)蓋

└─[上部にあるもの]→ 表紙

└─[容器と内容物との近接関係]→ (酒の)肴, おつまみ, タパ(ス)

◎ 「(酒の)肴, おつまみ」としてのタパ(ス)は, アンダルシアの居酒屋で, 甘いシェリー酒にショウジョウバエがたかかるとを防ぐために, シェリー酒のグラスに蓋の代わりとしてパンや肉を一切れ置いたことが始まりと言われている。

◎ 一般的に用いられている一皿(の料理)は plato という。また, tapa と plato の中間の大きさのものを ración という。

☐ caña

☐ caño

☐ cañón

☐ corona

☐ coronar

☑ 女

① (麦・竹などの中空の・節のある) 茎

② サトウキビ (=caña dulce / caña de azúcar)

③ 釣竿 (=caña de pescar)

④ (主に生ビール用の細長い) グラス

⑤ 生ビール (=caña de cerveza)

cf. vaso 男 (普通の) コップ

copa 女 (脚付きの) コップ

taza 女 (取って付きの) カップ



(f) caña



(m) vaso



(f) copa



(f) taza

cf. cerveza 女 ビール



◎意味変化は以下のとおり。

(麦・竹などの中空の・節のある) 茎

→ サトウキビ

[道具と利用者との近接関係] → 釣竿

[形状の類似性 (= 投影活動)] → (主に生ビール用の細長い) グラス

[容器と内容物との近接関係] → 生ビール

☑ 男

管, パイプ, 排水管

☑ 男

大砲 ▶ -ón 増大辞

☑ 女

① 冠, 王冠 ② 王位, 王権, 王国 ③ 光輪, 光背

④ (太陽の) コロナ

◎ 原義は「曲げたもの」。意味変化は以下のとおり。

(曲げたもの) → (頭にかぶる円状のもの) → 冠, 王冠

[道具と利用者との近接関係] → 王位, 王権, 王国

[神や聖人への投影活動] → 光輪, 光背

[太陽への投影活動] → (太陽の) コロナ

☑ 他

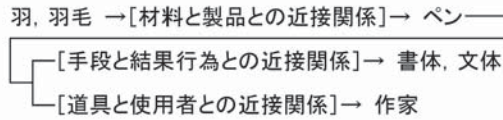
…に冠を授ける・王位に就ける ▶ -ar (動尾)



☐ pluma

**女** ① 羽, 羽毛 ② ペン ③ 書体, 文体 ④ 作家

◎ pluma の意味変化は以下のとおり。



☐ alcohol

**男** ① アルコール ② アルコール飲料, 酒(類)

◎ alcohol の意味変化は以下のとおり。

アルコール → [材料と製品との近接関係] → アルコール飲料, 酒(類)

☐ alcohólico, ca

**形** ① アルコールの[を含んだ] ② アルコール中毒の

**名** アルコール中毒患者 ▶ -ico, ica **形尾** → **名尾**

☐ lengua

**女** ① 舌 ② 言語 ③ 言葉遣い

lengua materna[patria] 母語

segunda lengua (母語に次ぐ)第二言語

lengua extranjera 外国語

[類] idioma **男** (一国の)言語

◎ lengua の意味変化は以下のとおり。

舌 — [手段と結果行為との近接関係] → 言語, 言葉遣い

◎ idioma は「或る国家・地域の特定の言語」(ex. el idioma japonés 日本語 etc.)を表す。他方, lengua は「抽象的な記号体系としての自然言語」(ex. las lenguas romances[románicas] ロマンズ諸語 etc.)を表す。

☐ lenguaje

**男** ① 言語活動 ② 言葉遣い ▶ -aje **名尾**

lenguaje artificial 人工言語

☐ lingual

**形** 舌の ▶ -al **形尾**

☐ lingüístico, -ca

**形** 言語(学)の **女** 言語学 ▶ -ico, -ica **形尾** → **名尾**

☐ cuero

**男** ① (牛などの主に加工した)革 ② 革製品

[類] piel **女** ① なめした皮, 毛皮 ② 皮膚, (動物の)皮

③ (果物の)皮

◎ cuero の意味変化は以下のとおり。

革 — [材料と製品との近接関係] → 革製品

◎ cuero は「やや厚めのなめし皮」を指す。他方, 類義語 piel は「材質としての皮革・毛皮・バックスキンなどの, しなやかななめし皮」を指す。

☐ seda

☐ sedero, ra

☐ lana

☐ lanero, ra

☐ hoja

☐ hojoso, sa

♀ ① 絹 ② 絹糸 ③ 絹織物

seda cruda 生糸

ruta de la sede シルクロード

seda dental デンタルフロス

◎ seda の意味変化は以下のとおり。

絹 → [材料と製品との近接関係] → 絹糸

└ [材料と製品との近接関係] → 絹織物

形 絹の ▶ -ero, era (形尾)

♀ ① 羊毛 ② 毛糸 ③ 毛織物

◎ lana の意味変化は以下のとおり。

羊毛 → [材料と製品との近接関係] → 毛糸

└ [材料と製品との近接関係] → 毛織物

形 羊毛の ▶ -ero, era (形尾)

♀ ① (草木の)葉 ② 紙片 ③ 書類 ④ (本, ノートなどの)1枚

⑤ (ナイフなどの)刃 ⑥ (ドア, 窓などの)扉, 戸

hoja seca 枯葉

hojas caídas 落ち葉

una hoja de papel 一枚の紙(≡ un papel)

cf. folleto (男)パンフレット, 小冊子 ▶ -eto(縮小辞)

◎ folleto と同源。ラテン語の f- で始まる語の多くが, スペイン語では h- で始まる語に変わった(ex. hacer < [羅]facere, hablar < [羅]fābulārī, huir < [羅]fugere)。その過程において, h- で始まる語は日本語の「ハ行」のように発音されていたらしいが, 現在では無音になった。この hoja も [羅]folia に由来する。このような音変化およびそれに伴う綴り字の変化に関する歴史的知識を知っていれば, hoja — folleto, hacer — perfecto や huir — fuga など, 派生語や関連語を覚えるのに非常に役に立つ。

◎ hoja の意味変化は以下のとおり。

(草木の)葉 → (書物は樹皮の内皮に書かれたことから)——

└ 紙片, (本, ノートなどの)1枚 ——

└ [容器と内容物(=文字)との近接関係] → 書類

└ [投影活動] → (ナイフなどの)刃, (ドア, 窓などの)扉, 戸

形 葉の多い, 葉の生い茂った ▶ -oso, osa (形尾)

☐ papel

☉ ① 紙 ② 書類 ③ [複] 新聞(≒periódico)

④ 紙幣 ⑤ 役割, 役目

un papel / una hoja de papel 一枚の紙

cf. papiro ☉ [複]パピルス

cf. rol ☉ ①(演劇の)役 ②役割 ③名簿, リスト

cf. rollo ☉ ①巻き物 ②円筒状に巻いたもの, ロール

cf. [英] role ☉ ①巻き物 ②役目, 役割

☉ papel の語源は、古代エジプトで用いられていた「パピルス(papiros)」という草の茎から製した一種の紙に由来。意味変化は以下のとおり。

パピルス(papiros)→[材料と製品との近接関係]→紙

└─[容器と内容物(=文字)との近接関係]→ 書類, 新聞

└─[材料と製品との近接関係]→ 紙幣

└─(演劇で役者の役割や役目を紙(巻き物)に記していたことから)

└─ 役割, 役目

☉ 上記の通り、「役割, 役目」の意は「演劇で役者の台詞や役割, 役目を紙(巻き物)に記していた」ことに由来する。なお、「(演劇の)役, 役割」を意味する rol と「巻き物, ロール」を意味する rollo とは語源を同じくする二重語であるが, rol に「(演劇の)役, 役割」の意があるのも同じ理由から。さらに, 英語 role が「巻き物」だけでなく「役割」の意を持つのも同様の理由による。

☐ papelería

☉ 文房具店 ▶ -ería (形尾) (～に関する) → (名尾)

☉ 「紙[papel]をはじめとする文具に関する[-ería]店」のイメージ。

☐ papeleta

☉ 紙片 ▶ -eta (縮小辞)

☐ pan

☐ ① パン ② 食糧, 生活の糧(かて)

ganarse el pan(de cada día (日々の)糧(かて)を稼ぐ

un pedazo[trozo] de pan パン一切れ

una rebanada de pan パン一切れ

el pan (nuestro) de cada día 日常茶飯事

例) Su queja es *el pan nuestro de cada día*.

(彼の不満は日常茶飯事だ)

cf. compañero, -ra ☐ 名 仲間 ▶ -ero, -era ☐ 名尾 (~する人)

cf. compañía ☐ 女 ①会社 ②同伴者, 一緒にいること(人)

▶ -ía ☐ 名尾

cf. acompañar ☐ 他 …と一緒にいく ▶ a- 他動詞化接頭辞 + -ar ☐ 動尾

◎ 意味変化は以下のとおり。

パン — [主要な食品としての近接関係]→食糧, 生活の糧(かて)

このように, ヨーロッパ世界において, パンが空腹を癒(いや)す上で主要な食品であったことは, 次のような諺(ことわざ)の中にも見られる。

例) No sólo de pan vive el hombre.(人はパンのみに生きるにあらず)  
なお, 日本語の「ご飯」を「炊いた米」の意だけでなく, 「食事」の意として用いるのも同様の捉え方による。

◎ compañero, compañía, acompañar に見られる pañ-は「パン, 食糧」の意を表す pan のこと。つまり, いずれも「共に[com-]パン[pan]を食べる間柄の人(の集まり)」のイメージで捉えられる。日本語の「同じ釜の飯を食う」という表現と同じように捉えられる。

☐ panadería

☐ 女 パン屋 ▶ -ería ☐ 形尾 (~に関する)→ ☐ 名尾

◎ 「パン[pan]に関する[-ería]店」のイメージ。

☐ panadero, -ra

☐ 名 パン職人 ▶ -ero, -era ☐ 名尾 (~する人)

☐ empanar

☐ 他 ①パン粉をつける ②パイ皮で包む

▶ em- 他動詞化接頭辞 + -ar ☐ 動尾

☐ empanada

☐ 女 エンパナダ(肉や野菜, 魚介などを詰めたパイ)

▶ -ada 過去分詞化語尾→ ☐ 形尾 → ☐ 名尾

◎ 「パイ生地で包まれた[empanada]もの」のイメージ。

- ☐ oro
- ☐ dorar
- ☐ dorado
- ☐ áureo
- ☐ aureola
- ☐ aurora

- 男** ① 金(きん) ② 金貨 ③ 金製品, 金細工  
④ 財力, 富 ⑤ 金メダル

oro puro 純金                      oro nativo 砂金  
pan de oro 金箔                      baño de oro 金メッキ

◎ 意味変化は以下のとおり。

金(きん)―[材料と製品との近接関係]→ 金製品, 金細工, 金貨, 金メダル  
└─[手段と結果行為との近接関係]→ 財力, 富

- 他** ①…に金箔を張る, 金メッキする  
②<料理>キツネ色に焼く<揚げる・炒める>

**再** こんがりと日焼けする ▶ -ar (動尾)

**形** ①金色の ②金メッキの

**男** 金メッキ, 金箔 ▶ -ado 過去分詞化語尾→ (形尾) → (名尾)

**形** 黄金の, 金色の ▶ -eo, ea (形尾)

**女** (聖人像などの)後光, 光輪 ▶ -ola 縮小辞

◎ 「金色[aur-]に光輝く」のイメージ。

**女** ①夜明け(の光) ②オーロラ ▶ -ora (名尾)

◎ 「オーロラ」の意は, 夜空に輝くオーロラが夜明けの日の光に似ていることから。

- ☐ plata
- ☐ platero, -ra
- ☐ platería
- ☐ platino
- ☐ plato

- 女** ① 銀 ② 銀貨 ③ 銀器, 銀食器 ④ 銀メダル  
⑤ (主に中南米で)お金

◎ 意味変化は以下のとおり。

銀―[材料と製品との近接関係]→ 銀貨, 銀器, 銀製品, 銀メダル  
└─(お金の代わりとして銀が最も頻繁に使われていたことから)→ お金

**名** ① 銀細工師 ② 宝石商 ▶ -ero, -era (名尾) (~する人)

**女** ① 銀細工術, 銀細工業 ② 宝石商 ▶ -ería (形尾) (~に関する) → (名尾)  
◎ 「銀[plata]に関する[-ería]店」のイメージ。

**男** プラチナ, 白金 ▶ -ino 縮小辞

◎ コロンビアのピント川河畔で発見された銀に似た白い金属をスペイン人たちが「ピント川の小さな銀(platina del Pinto)」と呼んだことに由来。

**男** ① 皿, 平皿 ② (皿に盛った)料理

◎ plano と同源で「平たいもの」のイメージで捉えればよい。

◎ 原義は「金貨/銀貨」。意味変化は以下のとおり。

(金貨・銀貨)→(板金)→(金属食器)→ 平皿  
└─[容器と内容物との近接関係]→(皿に盛った)料理

☐ bronze

- ☐ 男 ① ブロンズ, 青銅 ② 銅貨 ③ 銅像, ブロンズ像  
④ 銅メダル

◎ 意味変化は以下のとおり。

ブロンズ, 青銅—[材料と製品との近接関係]—  
↳ 銅貨, 銅像, ブロンズ像, 銅メダル

☐ plancha

- ☐ 女 ① 金属板 ② (料理用の)鉄板 ③ アイロン

plancha de vapor スチームアイロン

◎ 意味変化は以下のとおり。

金属板—[材料と製品との近接関係]→(料理用の)鉄板, アイロン

☐ planchar

- ☐ 他 …にアイロンをかける ▶ -ar (動尾)

planchar una camisa シャツにアイロンをかける

mesa de planchar アイロン台

「部分と全体 (parte y todo)」の関係で捉えられる表現

☐ mano

〔女〕 ①手(=手首から先の部分) ②腕前 ③ [複] 人手

④援助の手

◎ 日本語でも「人手」と表現されるのと同様に、「(作業をする役割を持つ)手 (mano)」という部分に焦点が当てられ、その人全体を表すことになる。

例) *Faltam manos.*

⇨ *Hay escasez de manos.*

(人手が足りない)

なお、こうした概念化は英語にも共通して見られるものである。

例) *This work needs more hands.*

(この仕事にはもっと(人)手が要る)

◎ また、「腕(=手首から肩の部分) (brazo)」に焦点を当てることで、その人全体を表すこともある。

例) *Aquí hacen falta brazos.*

(ここでは腕が足りない → ここでは(人)手が足りない)

☐ manual

〔形〕 手を使う, 手動の, 手製の

〔男〕 手引書, マニュアル, ハンドブック ▶ -al (形尾) → (名尾)

☐ cabeza

〔女〕 ①頭(=首から上の部分) ②頭脳, 思考 ③一人, 一頭

④頭状のもの

por cabeza 一人(一頭)あたり cf. per cápita [羅]一人当たり

例) *Pagamos diez euros*  $\left\{ \begin{array}{l} \textit{por cabeza} \\ \textit{per cápita} \end{array} \right.$ .

(一人当たり10ユーロを支払います)

◎ 日本語でも「頭数(あたまかず)」と表現されるのと同様に、「(知能を司る身体部位である)頭(cabeza)」という部分に焦点を当てることで、その人全体を表すことができる。

例) *Muchas buenas cabezas* trabajan en el instituto.

(研究所では多くの有能な頭が働いている)

→ 研究所では多くの有能な頭脳の持ち主が働いている)

☐ cabecera

〔女〕 ①ベッドの頭部 ②(本の)ヘッダー ▶ -era (名尾)

cuerpo

- corporal
- corporación
- corpus
- incorporar
- incorporación

boca

- bucal
- bocado
- bocadillo

**男** ① 身体, 肉体 ② 胴体, 胴部 ③ 死体

formar cuerpo con ~ ~と一体化する

例) La compañía *formó cuerpo con* la mayor empresa.

(その会社はより大きな企業と合併した)

◎ cuerpo が「胴体」と「体全体」という2つの意を持つのは、「部分と全体」のどちらに焦点が当たっているか、即ち「部分の焦点化」か「全体の焦点化」かの違いによる。

<部分の焦点化>



(頭/腕/脚は焦点外)

<全体の焦点化>



例) Juan es largo de *cuerpo*.

(フアンは胴が長い)

例) Alma sana en *cuerpo sano*.

(健全な精神は健全な肉体に宿る)

**形** 身体の ▶ -al (形尾)

**女** 法人, 団体 ▶ -ación (名尾)

**男** 資料体, コーパス

**他** [+a / +en ~に]組み入れる ▶ in- 動詞化接頭辞 + -ar (動尾)

**女** ① 合体 ② (職場などへの)配属 ▶ -ación (名尾)

**女** ① 口 ② 物の口 ③ 養い口

◎ 食行為の器官である「口(boca)」が焦点化されることで、「(食べる口を持つ)人全体」が表される。

例) Tiene ocho *bocas* en su casa.

(彼は家に8つの口を持っている→彼には8人の扶養家族がいる)

なお、日本語で「口減らし」と表現されるのも同様の概念化による。

**形** 口の, 口腔の ▶ -al (形尾)

Cf. bucal (形) 口の

◎ bucal という形もあるが、「声の, 音声の」を意味する vocal と同音で紛らわしいため、「口の, 口腔の」の意では bucal が用いられる。

**男** ① (食べ物の)一口, ひとかじり分 ② 軽食 ▶ -ado (名尾)

**男** ボカディージョ(フランスパンを用いたサンドイッチ) ▶ -illo 縮小辞

◎ 「食パンのサンドイッチ」は **男** sandwich と言う。





☐ cara

- 女 ①顔 ②参加者, 顔ぶれ ③(物事の)面, 側面  
④顔状のもの ⑤(硬貨, 切手などの)表側

◎ 「(人を認識・識別する上でその違いが最も顕著な身体部位である)顔(cara)」という部分に焦点を当てることで、その人全体を表すことができる。

例) Necesitamos *caras nuevas* para la compañía.

(会社には新顔が必要だ)

En el festival de cine había muchas *caras* famosas.

(その映画祭には多くの名だたる顔ぶれが参加していた)

なお、こうした概念化は日本語や英語においても共通して見られるものである。

例) [日本語]この辺りに立ち寄ることがあったら、また顔を出してよ。

[英語]There are a few *new faces* in our section this year.

(今年是我々の部署に数人の新人がいる)

☐ puerta

- 女 ①扉, ドア, 門, 入り口 ②家

de puerta a[en] puerta 家から家へ, 一軒ごとに, 一軒一軒

例) Jose anduvo vendiendo verduras *de puerta*  $\left\{ \begin{matrix} a \\ en \end{matrix} \right\}$  *puerta*.

(ホセは家から家へ野菜を売り歩いた)

◎ 日本語でも「一戸建て」と表現されるのと同様、人が出入りする「戸(puerta)」という部分が焦点化されることで、「一軒家」全体が表される。

例) Mi abuela vive en la *puerta* de enfrente.

(ホセは家から家へ野菜を売り歩いた)

なお、こうした概念化は英語においても共通して見られるものである。

例) [英語] My parents live *next door* to me.

(両親は私の隣のドア(=家)に住んでいる)

John sells cosmetics (*from*) *door to door*.

(ジョンはドアからドアへ(=一軒一軒)化粧品を売り歩いている)

また、日本語では、以下に見られるように、「ドア」ではなく「門」に焦点を当てることで「一軒家」全体を表すこともある。

例) 笑う門(かど)には福来たる。

- 男 ①玄関 ②[複]アーケード ▶ -al (形尾) → (名尾)

- 名 守衛, 門番 ▶ -ero, -era (名尾) (～する人)

☐ portal

☐ portero, -ra

## ☐ techo

## 男 ①屋根 ②天井 ③家

◎ 「(雨風を凌ぐために重要な部位である)屋根(techo)」という部分に焦点を当てることで、その「一軒家」全体を表すことができる。

例) Viví bajo el mismo *techo* con María tres años.

(私は3年間マリアと同じ屋根の下で暮らした)

No me dieron ni *techo* ni ración.

(私は雨風を凌ぐ屋根(=泊まる場所)も食べ物ももらえなかった)

なお、こうした概念化は日本語や英語においても共通して見られるものである。

例) [日本語] 私は両親と一つ屋根の下で暮らしている。

[英語] I live under the same *roof* as her.

(私は彼女と一つ屋根の下に住んでいる)

また、日本語では、以下に見られるように、特に「屋根の下端にある建物の外部に差し出たところ」である「軒(のき)」に焦点を当てることで「一軒家」全体を表すこともある。

例) 10数軒(けん)の店が立ち並ぶ。

## ☐ teléfono

## 男 ①電話機 ②受話器 ③電話番号

◎ 下例の文は、

例) De repente, sonó el *teléfono*. (突然、電話が鳴った)

José { *cogió* } el *teléfono*. (ホセは電話を { 取った } )  
           { *colgó* }

それぞれ文字通り、「電話機全体が鳴った」、「電話機全体をつかんだ→取った/吊るした→切った」という事象を表しているわけではない。正確には、全体である *teléfono*(電話機)の指示物を表す語でもって、各々その一部である「電話のベル」、「電話の受話器」を表している。

◎ なお、「吊るす、掛ける」(cf. 『小学館 西和中辞典』(s.v.

*colgar, vt., 1*))を意味する動詞 *colgar* を用いて「電話を切る、通話を切る」事象を表現するのは、右図に示されるように、昔の電話機は上方に設置され、「受話器をフックに吊るす/引っ掛けることで通話を切る」構造になっていたことに由来する。

なお、英語で「電話を切る」ことを *hang up*、「電話を切らないで待つ」ことを *hold on*、「電話をして、その電話に相手が出る」ことを *call up* と言うのも同じ理由である。



☐ **vuelta**

- ☐ ①回転 ②巡回 ③帰ること ④反転, 曲がること, カーブ  
⑤お釣り

◎ *vuelta* の中心的イメージは「回転」, 特に「一回転」である。

例) Ese camino da la *vuelta* al lago.

(その道は湖の回りを一周している)

Di una *vuelta* en coche por Andalucía el mes pasado.

(先月、私はアンダルシアを車で一回りした)

Quiero dar la *vuelta* al mundo algún día.

(いつか世界一周したい)



◎ 他方, 以下の二例(a)-(b)においては,

例) a. Di la *vuelta* a la página.

(私はページをめくった)

b. Da *vuelta* a la derecha.

(右に曲がりなさい)

各々下図(a')-(b')に示されるように,

例) a'.



b'.



点線で描かれた「円」という「全体」を背景とし、それぞれ実線で示された「半円」および「1/4の円」という「弧(=部分)」の軌跡が「焦点化」されている。これを以下にまとめる。

*vuelta* のイメージ:

一回転 —[一回転によって示される「円」全体の一部分が焦点化]→ 弧

また, 次の二例(c)-(d)においても同様に,

例) c. El coche dio la *vuelta*.

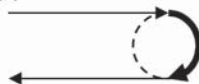
(車はUターンした)

d. Me encontré por casualidad con um amigo en el camino de *vuelta* de la universidad.

(私は大学からの帰り道に友人と偶然出会った)

以下(c')-(d')の図に示されるように、「部分と全体」の認識によって捉えればよい。

例) c'.



d'.



- volver
- vuelto, ta

girar

- giro
- giratorio, -ria
- girasol

◎ さらに、季節の移り変わりは、「円循環」として捉えられることから、次例(e)は下図(e')に示されるように、円周軌道の一部を焦点化した概念の現れと考えられる

例) e. Ya estamos a la *vuelta* del verano.  
(夏もうすぐそこだ)



- 他** ①～の向きを変える ②[+a... …に/+hacia... …の方向に]～を向ける  
③～に変える
- 自** ①(特定の場所に)戻る ②[+a+不定詞 …] 再び～する
- 再** ①(特定の場所か元の場に)戻る ②振り返る  
③[+a... …に/+hacia... …の方向に]向く ④～になる ▶ -er (動尾)
- 形** ①(ある方向に)向いた[向けた] ②ひっくり返した  
▶ -to, -ta 過去分詞化語尾 → (形尾)

- 自** ①回る, 回転する  
②[+a... …に/+hacia... …の方向に]曲がる, 方向を変える  
▶ -ar (動尾)

◎ 動詞 girar の中心的イメージは「(円を描くような)回転」である。

例) La Tierra *gira* alrededor del Sol.  
(地球は太陽の周りを回っている)

そして、「円」全体の一部分である「弧」に焦点を当てることで得られた拡張概念の一例が次例である。

例) El coche *giró* a la izquierda.  
(その車は左に曲がった)

- 男** 回転, 旋回 ▶ -o (名尾)
- 形** 回転(式)の, 旋回の ▶ -torio, -ria (形尾)
- 男** ヒマワリ

◎ 「花が太陽[sol]を追って向きを変える[giar]」という考えから。